

連載

やすいあさこ  
安居總子の国語教室 ④

## 教師の書き文字

### 一 教師の書き文字は 最高の学習材

文字の下手な（下手だと思ひ込んでいる）人間にとって、パソコンは救いの神でした。最近は「ワークシートづくりはパソコン」という時代になりましたが、それでも生徒の学習へのコメントや板書は手書きです。朱で書き入れる教師の生徒への指導や励ましの言葉は、ぬくもりのあるコミュニケーションを作り出しています。掲示も同様です。

教師の書き文字は、学校の言語環境、国語教室では文字学習環境を形造っています。正しくて美しい字体は、目で見て覚え、それに似せて字を書き、自分の書き文字として獲得し、文字感覚を身につけるのに最適です。学習者にとって教師の書き文字は最高の学習材なのです。でも、教師の働きかけがなければ、本当の学習材にはなりません。ましてや、文字が下手だからといってあまり書か

ず、上達も願わず、パソコンにまかせたまま国語教室の運営にあたっているとしたら、文字の学習指導は無きに等しいといわねばなりません。

### 二 文字感覚を育てることが目標

文字の学習の一つに書写技能習得があります。学習指導要領では「言語事項」に位置づけられて、字形認識の力、文字の配列・字配り（字間・行間・文字の大きさ・用紙への配置）の力、書式・用具使用の力を育てることを目標とします。昔から「手習い」「習字」といって、手本を書き写すことが主たる学習でした。これは取り立て指導で、目標をもつて練習すれば効果はあります。しかし、今、実の力として身につけているかとなると少々疑問です。なぜなら、その時間が国語の学習とは異質な学習展開となっており、学習目標を持たぬまま時間が流れていることが多いからです。

改善の方法は二つあります。

- ①年間カリキュラムに書写の学習時間をどのように配置するか工夫する。
- ②書写学習に対する教師の意識改革をする。

目標が、字体を正しく速く整えて書く訓練をして書写技術を高めること、書写技能習得を通して文字感覚を養うことにあるのですから、そのためにどのような授業を進めるか考えるべきです。中

学生には、毎週一時間の設定で年間二十八回行うという、昔ながらの習字の学習方法は適しません。中学生なので、年間五回、四～六時間の単元を設けて集中的に技能を身につけるほうが効果はあります。また、正しい字形への感覚や意識も育てられます。

### 三 教師の「書き文字」修業

私は教師になったとき、最初に行ったのは、鉛筆による硬筆習字でした。マス目（12×16目）のノート四マスを一マスにとってそこに一字書くという練習です。今なら市販の「十字リーダー入り8マスノート」がそれにあたります。十字に仕切られたマス目だと、文字の中心がわかる、上下、左右のバランスを考えることができる点で有効でした。そこで、字体を整える技、美しく書くこととする意識は育ったと思います。そのほかに、毛筆と

あわせて、次のことに注意して練習しました。

○漢字を楷書で、字形を整えて書く。

○とめ、はね、左はらい、右はらい、折れ、曲がり、そり、接し方・交わり方、特に接筆。「口」

「口」で



今まで、字体のことなど無頓着でいた人は、自分自身で字体の矯正（きこうせい）をすることが必要です。生まれてからこのかたの変な書き癖がついていて思わずはっとさせられます。

### 四 書いて脳を鍛えることを

最近の脳科学研究が解明した「前頭前野の働き」は、音読する、（聞くだけでなく）人に向かって話す、字を書く（漢字は書きながら覚える）によって鍛えられるということです。「字を書く」「書いて覚える」をもっと大切に。（大正大学教授）